

【東京】東大卒の元教員志望が児童精神科医になった理由-大和行男・医療法人社団先陣会理事長に聞く◆Vol.1

子ども一人一人の未来にアプローチできるのは教師ではなく児童精神科医

2025年5月21日 (水)配信 m3.com地域版

東大卒で元教員志望、会社員生活を経て児童精神科医になった珍しい経歴を持つ医師がいる。医療法人社団先陣会（八王子市）の大和行男理事長は次世代を育てたい思いから教師を目指したものの、教育実習時に転機となる出来事に直面した。「子ども一人一人の未来にアプローチできるのは教師ではなく、児童精神科医だと思った」と話す大和氏が、現在も全国的に担い手の少ない分野に着目した経緯を聞いた。（2025年4月15日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



大和行男氏（本人提供）

源氏物語を原文で読んでいた子ども時代、地理歴史にも興味

——資料によると、大和先生は東京大学教育学部を卒業した後、医師の道を進みます。元は教員志望だったそうですね。

そうですね。私は幼少期から古文や漢文、和歌を読むのが好きで、小学生の頃には枕草子や源氏物語、中国の四書五経などを原文のまま読んでいました。なぜか自然と親しむようになり、親に本を買ってもらっていろいろと読んでいたのですが、やがて作品の背景となる地理や歴史にも興味を覚えるようになり、これらもずっと勉強していました。

教師を志すようになったのは、親のアドバイスからです。地理や歴史が大好きだとはいえ、「それだけだと仕事になりづらいから、教師になったらいいんじゃないか」と言われて。自分でも合っているのではないかと思いました。地理歴史には深いものがあるので、教師になればその面白さを伝えられますし、高校生の頃には「次世代を育てたい」思いも高まっていました。歴史には、「過去から学んで未来に生かす」という捉え方があります。例えば、ガリアを平定した古代ローマのカエサルは、東方遠征で知られるアレクサンドロス大王の偉業に感銘を受け、彼をロールモデルにしていたと言われています。そんなふう、私も後世にバトンをつなぐ役割を担いたいと思ったのです。

「学校に来ない子は教育の対象外」という教師の言葉に違和感

——教師への思いを持っていた中、なぜ医学部に入学したのですか。

子どもたち一人一人の未来にアプローチできるのは教師ではなく、児童精神科医だと思うようになったためです。転機は大学4年の頃、母校である群馬県立前橋高校で教育実習を行っていた時にありました。実習の初日が2日目だったと思います。私がまだ新しい環境に慣れていない中、担当したクラスの生徒でないにもかかわらず、話しかけてくれた子がいました。その子は私に聞きました。「周りから勉強しろと言われるけれど、東大に行って何か変わるんですか」と。前橋高校は進学校ですが東大合格者が多いわけではないので、珍しさや興味があったのかかもしれません。

しかし、その子は数日して不登校になりました。なぜだろうと私は戸惑い、教職員会議でケアしたいと申し出ましたが、受け入れられませんでした。「高校は義務教育ではないから、学校に来ない子は教育の対象外」と言われたのです。その後も何度か希望を伝えましたが、「その話はもういい」とはなづけられました。学校の先生は1人で30～40人の生徒を見るので、不登校になった子1人に時間や労力を割きづらいのは想像できます。しかし、私は勇気をもって自分に話しかけてくれた子に寄り添いたいと思いました。

不登校の子に関われる仕事はないだろうか——。そう考えるようになった時に知ったのが、児童精神科医の存在です。実習先で出会った信頼のできる先生にその子のことを相談すると、「自分であれば、こっそり親御さんに連絡して児童精神科に相談することを勧めるだろう」と言われて。「なるほど、そんな仕事があるのか」「私がやりたいのはまさにこれだ」とピンと来ました。私の周囲に医療従事者はおらず、それまで医師への道は全く考えていませんでした。私は、「医師になりたい」ではなく、自分の問題意識からピンポイントに「児童精神科医になろう」と決めたのです。

——印象的な出来事です。先生は2000年の東大卒後、2年ほどの会社員生活を経て新潟大学医学部に入学します。

親に再び学費を出してもらうのは申し訳なかったのも、その分は自分で稼ごうと金融系のシステム会社に入社しました。就職したのは、児童精神科医の仕事を想定しての選択でもあります。日本の場合、20～30代の若い人の多くは会社員なので、児童精神科に来る子どもの親の立場を体感したい思いがありました。結果、200～300万円ほどを貯め、新潟大学医学部に進むことができました。

復興支援したいと山形に移住、研修で齊藤卓弥氏に師事

——研修先では「児童精神科の著名な医師に指導してもらった」と資料にあります。

山形県の佐藤病院で、齊藤卓弥先生（現北海道大学医学部児童思春期精神医学講座特任教授）に学びました。後期研修をこの病院にしたのは複数の理由があります。私が初期研修医だった2011年に東日本大震災が起き、東北に住む多くの人に関東に移り、また、関東の人に関西方面に流れる動きがありました。その中には医師もいましたが、私は逆に、東北で働きたいと思いました。「復興支援をするのであれば、その地に住んで働くのが最も貢献度が高いだろう」と。一方、医師としては児童精神科を専門的に学べて、精神保健指定医を取得できる環境に身を置きたいと考えていました。

齊藤先生は当時、日本医科大学で准教授を務めていましたが、佐藤病院で週に1回、児童思春期の専門外来を行っていました。精神保健指定医を取得するには多くの患者さんがいる病院で診療経験を積む必要があります。その意味で、佐藤病院は2006年に東北で初めて精神科救急を立ち上げ、24時間患者さんを受け入れています。復興支援ができ、児童精神科を学べる。精神保健指定医も取得できる——。条件を満たしているのがこの病院でした。

◆大和 行男（やまと・ゆきお）氏

2000年東京大学教育学部卒。2010年新潟大学医学部卒。佐藤病院（山形県）での後期研修後、埼玉県済生会鴻巣病院、横浜カメリアホスピタル、東横恵愛病院を経て2017年に開業。東京都内で3つのクリニックを開業し、現在は「池上おひ

さまクリニック」（大田区）の診療に注力する。子どものこころ専門医、日本精神神経学会専門医・指導医、精神保健指定医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

